

文 士 學 瓊 波 沼 先 生 選 生

市人○の○冷○たき○笑○み○に○我○は○此○散○髮○の○亂○れ○可○愛○し○と○嘲○笑○ふ○か○。さ○は○れ○聞○

馬○の○背○に○つ○け○し○こ○の○二○儀○の○新○米○よ○、背○の○君○が○留○守○を○、

女○の○織○手○に○心○細○く○も○辛○う○じ○て○得○た○る○、尊○き○、尊○き○、寶○

な○る○そ○。價○高○し○の○一○言○に○見○向○き○も○せ○ぬ○市○人○。さ○は○人○

其○む○に○心○め○け○み○富○に○媚○び○貧○に○ほ○れ○る○其○の○顔○に○、う○か○べ○る○冷○たき○笑○み○に○我○が○此○散○髮○の○亂○れ○可○愛○し○と○嘲○笑○ふ○か○。さ○は○れ○聞○

そ○の○か○そ○に○か○つけ○し○ち○き○り○て○神○に○銃○と○り○た○す○我○背○の○君○が○君○の○御○爲○

一○行○さ○は○れ○れ○の○針○燈○は○れ○れ○の○針○灯○こ○の○布○を○き○き○み○情○け○深○き○姑○君○が○己○れ○稻○

紙○真○心○こ○め○て○て○老○の○手○も○との○覺○束○な○く○そ○身○

より薄○き○世○の○人○心○の○な○ど○て○味○

賀川町

別

○ 冷 たき 笑 み

服 部 貞 子

○冷たき笑み

岩代須  
賀川町

服部貞子

○我○は○ま○た○此○の○馬○の○背○の○米○を○賣○ら○

文士學士。選生先音瓊波沼。



天哀調

上總千代田村  
岩山内田方

夏村女史

いざよひの月は、中空に冴え、磯洗ふ波の音は、夜と  
共に沈みつ。今宵は彼岸のつくる夜、遙かなる入海の  
上、漁り火の一・點・だになし、汪々と満ちたる潮は、砂  
濱の罅隙を呑んで、音もなう。陸地へ長く、獵師町を分  
けて、水深き小川をなせり、そこに橋あり、手欄なく  
廣板を並べしなり、ぞよめきは、疎らに續く茅屋根の  
かげに聞えて、程もなく、逞しき獵師の群れ、白髪も  
つれし老翁を先きに、若き壯んなる、十人あまり、満  
ち封じたる月の光を割つて、橋の上に並み立ちぬ。老

の汗の賜をひそかに盗めるさもしき人の手より買ひ  
ね。我か米はさる汚はしきものにはあらぬを。  
市人よ、笑はゞ笑へ。私は再び市には出でじ。榮華の  
夢を貪る人々にはまみえし。  
たゞ老いませる姑につかへむ。愛らしの馬と勞はらむ。  
かくてやがてかへりまさむ背の君を、われは待たむ。